

食科協20周年に寄せて

NPO 法人食品衛生科学情報交流協議会

理事

広田 鉄磨



憧れの団体としての食科協：

海外で13年近くを過ごした。グローバル企業の特徴として 私以外には 日本人のスタッフはほとんどおらず、 現地の人間たちと仕事をし、アフターファイブを楽しみ 常に英語と現地語の中にいた私は 2010年に 今浦島のようになって日本に帰還してきた。（その「ぼけ」ようはひどく） 同僚から 「お前の日本語での会話は 何を言いたいやらさっぱりわからん！」と けなされる始末。（日本語での）時候の挨拶など まったくできなくなっていた。そんな私が 日本を離れている間 インターネットで見つけて恋焦がれていた団体があった。その名は食科協。

森田顧問が まだ厚生労働省に乳肉衛生課長として勤めていらっしゃった折に 私は N社のアセプティック乳飲料の常温流通申請のため厚生労働省に足しげく通う身であった。厚生労働省という省庁は その建物にもさっぱり色気がないが 当時の乳肉衛生課は 天井にまで届く灰色のキャビネットと 積み上げられた書類の山が異様な重圧感を醸し出し、提出書類の小さな部分での不備を当時の技官に攻めまくられて 青色吐息、生きた心地もしなかった思い出がある。覗き込みにきた森田課長の「書類に大きな問題がないのであれば いいんじゃないの 受理したら？」との鶴の一声がなければ 私は取調室の犯人よろしく 取り調べに次ぐ取り調べ攻めにもがき苦しんでいたであろう。大局をもって判断するという この鶴の一声のおかげで 技官は得心いかぬという顔をしながらも 私の差し出す申請書類を受け取ってくれた という思い出がある。まさに 地獄に仏。この方が立ち上げた団体ということで 食科協は まだ見ぬ恋人といってもいいほどに 私の恋慕の思いを掻き立てる団体であった。

そして 2015年にN社を退社、自分で食品安全啓蒙のための団体を立ち上げ コンサル企業の顧問をやり、どちらにも共通した課題であった 食品衛生の指導にいい教材はないか それも 小難しいことばかり言って煙に巻くようなものではなく 誰もが（たとえ小・中学生であっても）きちんと理解できるもの と探しまわっている折に 関澤現顧問が開発されたトレーニングキットに出会い こんなに充実した内容が無償で提供されているとはと感嘆のおもいを深くした。なんとか 中身をそっくりいただいて 自分の教材の中に とりこみ 例えばスマホで簡単に見ることができるような運用はできないか と画策はしたが 全体のコーディネートはうまく行かなかった。しかしながら 関澤先生との接点を持つことができ 食科協は まだ見ぬ恋人から 実際に会話を交わす恋人となった。

なかなか食科協への恩返しができぬ自分：

会員登録からほどなくして理事への推挙までいただき 一発奮起して 食科協の大阪支部を自負し厚生労働省の課長クラスを大阪に招いて講演してもらおうと画策したが 私が選んだ会場は その会場による主催という題目なしには割引価格での会場の貸し出しをしない ということで座礁してしまった。

理事会では 情報収集・分析の役割を期待されているというお達しがあったが 多忙にかまけているうちに 沙汰なしとなってしまった。

コロナ禍の発生以降は 自分の団体の研修群がガタガタになってしまい リモートという選択肢でつっぱしるしかないか リモートとリアル併設も視野に入れるべきか、それともリアルのみで捲土重来のタイミングがくるのをじっくり待つべきか 試行錯誤に明け暮れている間に 食科協への貢献は全くできないままに 2年余が経過してしまった。定例の理事会にすら なかなか顔を出せないでいる。こんな自分を温かく包んでくれている食科協には ますますの恩義が積みあがっている。

恩返しができるとすれば 今 試行錯誤ののちに リモートのみ、リモートプラスリアル、リアルのみ と研修の特性 と受講者の属性に応じて出方を変えるのが一番いいと肌で体得したノウハウを 食科協が主催 あるいは共催する研修に持ち込んでいくことで 食科協による研修事業というものを立ち上げていくことではないか と感じている。食科協は現在までセミナー中心であったことはその歴史が如実に示している。セミナーというものは全参加者の水準をある程度高い位置に固定できる場合には 情報交換の場として素晴らしく効果的に機能する。厚生労働省や消費者庁からスピーカーを招聘し 意識が高くそろった参加者を会場に配置し モデレーターが間をとりもって 対話を触媒反応させるという今までのセミナーの成功事例の積み上げは まさに この機能を100%生かし切っていることを示している。

しかし 食科協が 社会に対してのこれほどの影響力を維持しつつ 栄光の歴史を刻んできたのであれば 今後は セミナーという どちらかといえば上澄み部分の事業ばかりではなく もっと底辺に近いクラスターにもそのメリットを享受してもらうことを目指すべきではないか それをなすのは研修事業ではないか と感じている。非営利事業団体として清廉潔白、しかし 人材は綺羅星のごとくそろえている食科協であれば 低価格で質の高い研修を敷衍していくことが十分に可能であると思われる。